

■**島義勇** “北海道開拓の父”。藩士時代に蝦夷地調査，維新後，札幌の都市建設に着手も罷免，佐賀の乱起こし斬罪。
しまよし たけ
膝栗毛終・・・1822＝ 肥前国佐賀城下の精小路で，佐賀藩士島市郎右衛門の長男に生まれる。母は同藩士木原壮兵衛満雅の四女つね。幼名は市郎助。通称は团右衛門，字は国華，楽斎，桜陰の号。

学問を能くする家風に育ち，

富籤流行・・・1830＝ 8歳：藩校{弘道館}蒙養舎に入学。
富籤三十六景1831＝ **9歳**：

従兄弟の副島種臣の実兄枝吉神陽とともに日本史や古典を学び，その父で{弘道館}教諭だった枝吉南濠の「日本一君論」に感動し，同じ考えを持つようになる。

大塩平八郎乱1837＝15歳：

勲進帳初演・1840＝**18歳**：

天保改革終・1844＝22歳：{弘道館}を卒業し，家督を継ぐ。諸国を遊学し，佐藤一斎・藤田東湖・林桜園らに学ぶ。
阿部正弘首座1845＝23歳：
孝明天皇・・・1846＝24歳：帰国して，物頭となり，
・・・1847＝25歳：{弘道館}目付に，のち藩主鍋島直正の外小姓となる。

北斎没・・・1849＝**27歳**：

ペリー来航・1853＝31歳：
開国開港・・・1854＝32歳：藩命により江戸へ遊学し，佐藤一斎や藤田東湖のもとで勉学に励む。
ロシアの南下に伴い，幕府が蝦夷地の警衛と開墾のため，有力藩を参入させるという噂に，
松下村塾・・・1856＝34歳：藩主**鍋島直正**から**蝦夷地調査の命**を受けて，
蕃書調所・・・1857＝35歳：***箱館に到着**。松浦武四郎の協力を得て，箱館奉行堀利熙の中小姓として同行を許され，**蝦夷地と樺太を探検調査**。日誌「**島義勇旅日記**」「**奥州並箱館松前行日記**」「**入北記**」「**箱館日記並東洋記**」を残す。
五ヶ国条約・1858＝**36歳**：**帰藩**。御蔵方組頭となる。
桜田門外変・1860＝38歳：

禁門の変・・・1864＝42歳：新設の香焼島勤番所隊長に任命される。次いで，**海軍に当たる御船方勤務を命じられ**，藩が幕府から借用していた**軍艦{観光丸}**の艦長となるも，**{観光丸}返還で直ぐに終わる**。

大政奉還・・・1867＝**45歳**：
明治維新・・・1868＝46歳：鳥羽伏見の戦いののち，鍋島直正の命により御軍艦奉行として佐賀海軍{孟春丸}に乗り組み兵庫へ向かう。新政府の指示で，東上し下野鎮圧軍大総督軍監となり，東北征討に従う。横浜で，新政府への幕府海軍の引渡し交渉に立ち会い，勝海舟らとも会談。直正が新政府の議定となり軍防事務局補に任じられるに従い，江戸鎮城府権判事に任命され，民政と会計を担当。鎮台府判事，民政掛・徳川領地取調掛となる。鎮台府が廃されて鎮将府となり，さらに鎮将府も廃され，会計官判事になる。

版籍奉還・・・1869＝47歳：会計官判事のまま，府県御用掛，次いで***蝦夷地を北海道と改名して内国領土化するに当たって，蝦夷開拓御用掛を命じられ**，開拓使設置で鍋島直正が長官に抜擢されるとともに，開拓判官に任命され，業務を主導。銭函に開拓使仮役所を開設し，札幌を本府と決め，建設に着手。無人の原野に“五州第一の都”を造るという壮大な構想を描き，京都や故郷の佐賀などを念頭に置いて，碁盤の目のような整然とした町並みを目指し工事を進め，移民の募集までもするが，厳冬酷寒の雪国での都市建設は多額の費用と労力と困難を要し，鍋島直正後任の長官東久世通禧とも衝突，物資輸送のために所管となった二艦のうち，まず{咸臨丸}が沈没，
初の日刊新聞1870＝48歳：**続いて{昇平丸}も沈没するに至って，ついに解任**。志半ばで帰京し，北海道・樺太経営の資金について献言。大学少監に転じるが，国学・漢学主導権争いに関して楠田英世大丞らと対立，松平慶永ら幹部や教官とともに罷免され，大学も廃止される。

廃藩置県・・・1871＝49歳：***明治天皇の侍従となると，までも侍従長に東久世が登場**。廃藩置県で，秋田県の初代権令に任命され，
学問のすすめ1872＝50歳：**現地に赴いて庁舎を整備するが，八郎潟開発などについて政府に陳情するも認められず，免官となる**。太政官宛建白書に‘石狩府を北京と改め，天皇避暑の離宮にして欲しい’と記す。

明治6年政変 1873＝51歳：**情勢鎮静の命を受けて佐賀に帰るも，新任の佐賀県令の言動に立腹，結局{憂国党}の党首に担がれ**，
佐賀の乱・・・1874＝52歳：***江藤新平と共に佐賀の乱を起こすが敗れ，鹿児島まで逃亡**。島津久光を頼り，大久保利通に助命の旨を取り次いでもらうが受け入れられず，捕らえられ，斬罪梟首となった。
翌年，島義勇の従者であった福玉仙吉が，鎮魂のため，北海道神宮の参道に桜150本を植え，円山公園の桜の始まりとなる。島の解任の2年後には，島の案に沿って札幌建設が再開され，大正9年には小樽を，昭和15年には函館を抜いて，名実ともに北海道一の都市となっていく。札幌市役所と北海道神宮に顕彰銅像，円山公園には“島判官紀功碑”がある。命日の4月13日には北海道神宮で北海道開拓と神宮創祀のその功績を偲び，“島判官慰霊祭”が毎年催されている。